



Title	谷崎潤一郎のボードレール受容に関する一考察：谷崎訳《LeFou et la Venus》をめぐって
Author(s)	北村, 卓
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 43-54
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/69914">https://doi.org/10.18910/69914</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 谷崎潤一郎のボードレール受容に関する一考察 ——谷崎訳 « Le Fou et la Vénus » をめぐって——

北村 卓

## はじめに

谷崎潤一郎 (1888～1965) におけるシャルル・ボードレール Charles Baudelaire (1821～1867) の受容については、芥川龍之介、佐藤春夫、小林秀雄らの発言から形作られた見解、すなわち表層的かつ一過的に止まったという否定的な見方が従来一般的であった。しかしながらボードレールからの影響は、小説家谷崎の創作過程においてきわめて重要な位置を占めることを筆者はすでに指摘した<sup>1</sup>。

谷崎のボードレールへの関心は、『饒太郎』(「中央公論」1914(大正3)年9月<sup>2</sup>)にまず姿を現し、1916(大正5)年頃を境に急激に高まる。『鬼の面』(「東京朝日新聞」1916年1月～5月)、『病辱の幻想』(「中央公論」同年11月)、『檻褻の光』(「週」1918(大正7)年1月)、『前科者』(「読売新聞」同年2～3月)、『金と銀』(「黒潮」同年5月、「中央公論」同年7月、「中央公論」発表時のタイトルは「二人の芸術家の話」)、『鮫人』(「中央公論」1920(大正9)年1月～10月)、『AとBの話』(「改造」1921(大正10)年8月)らの作品では、鮮明にその痕跡が確認される。さらに1919年10月と1920年1月の「解放」誌には、それぞれ「ボオドレエル散文詩集」、「不思議な人—ボードレエル散文詩集(ママ)」と題し、ボードレールの散文詩計8篇を、英訳からの重訳ではあるが自ら訳出して掲載するまでにいたっている。本稿では、『谷崎潤一郎全集』第7巻(「中央公論社」2016年)に従い、この両者を併せて「ボードレール散文詩集」と表記する。

ボードレールの影響は、谷崎特有のマゾヒズムやアイデア論の形成と密接にからまりながら、現実の姿を取った永遠の美の女神に拝跪する道化＝痴人(愚人)＝芸術家という図式を構築するに当たり、決定的ともいえる役割を果たした。そこを起点として、谷崎は初の長編『痴人の愛』(1925(大正14)年)を完成させ、短編作家を脱することが可能となったとも考えられるのである。こうした枠組みが『春琴抄』(1933(昭和8)年)をへて最晩年の『瘋癲老人日記』(1937(昭和37)年)にいたるまでの谷崎文学の根幹をなすことはいうまでもないだろう。

<sup>1</sup> 北村卓「谷崎潤一郎とボードレール—谷崎訳「ボードレール散文詩集」をめぐって」、大阪大学言語文化部・言語文化研究科「言語文化研究」第18号、259—278頁、1992。なお、これは日本比較文学会関西大会シンポジウム「谷崎と西洋」(於 甲南女子大学 1990年6月)にて発表した研究をもとにしている。

<sup>2</sup> カッコ内には初出の掲載誌(紙)と年月を記している。本段落、以下同様。

## 1. 谷崎潤一郎「ボードレールの詩」(1916)

さて、永遠の女性に拝跪する道化／芸術家の図式はボードレールの散文詩 « Le Fou et la Vénus » (「道化と美神 (ウェヌス) 」) に端的な形で現われている。前述の「ボードレール 散文詩集」(この作品の掲載は 1919 年 10 月) では、「ヴィナスと愚人と」のタイトルで訳されているのだが、その 3 年前、1916 (大正 5) 年 6 月の段階ですでに訳出されていたことが近年明らかになっている。谷崎が「社会及国家」という雑誌に寄稿した「ボオドレエルの詩」という一文においてである。これは細江光氏によって発掘され<sup>3</sup>、『谷崎潤一郎全集』第 4 巻 (「中央公論社」2015 年) にも収録されている。この文章において、谷崎はテオフィル・ゴーチエ Théophile Gautier の「有名なボオドレエルの評伝」の英語訳を参照したと書いているが、その「評伝」とは、ボードレールの死後、ミシェル・レヴィ兄弟社 Michel Lévy frères から刊行された『ボードレール全集』第 1 巻『悪の華』*Les Fleurs du mal* (初版は 1868) の巻頭に付された序文のことである。このミシェル・レヴィ兄弟社は兄 Michel の死後、弟の名を冠したカルマン・レヴィ社 Calmann-Lévy となり、そこから普及版も出版されてボードレールの全貌を世に知らしめることになる。そして谷崎が読んだ英訳本とは、彼自身がそこに記しているように、ギー・ソーン Guy Thorne の訳によるもので、1915 年に刊行されたものである<sup>4</sup>。そこにはゴーチエの序文に加え、ボードレールの韻文詩 14 篇、散文詩 5 篇、フローベールとサント＝ブーヴに宛てた手紙の翻訳およびボードレールの影響をめぐるソーンの論考が併載されていた。

さて、ここで谷崎は、ゴーチエの文章から強く自分の関心を惹いた箇所を日本語でまとめたり、英語で引用したりしているのだが、たとえば次のようなくだりが読める。

……成る程彼 (ボードレールのこと：筆者注) は人間の墮落、頹廃、罪悪に対して不思議な誘惑を感じ、常にその美を歌ったけれども、彼は寧ろ其の美を通して、その美の奥に潜む永遠に憧れ不滅を慕うて居たのであつた。彼に美感を齎す所の地上のもろもろの現象は寧ろ永遠の实在、——永遠の美の表徴に過ぎなかつた。(『谷崎潤一郎全集』第 4 巻、494 頁<sup>5</sup>)

ゴーチエの論に添いながらも、そこから谷崎は永遠不滅の美を求める芸術家の姿を切り取り、強調している。さらに谷崎は、フランク・ピアス・スターム Frank Pearce Sturm による英訳『ボードレール詩集』<sup>6</sup>から 3 編の韻文詩 “The Sadness of the Moon”(« Tristesses de la

<sup>3</sup> 細江光「谷崎潤一郎全集逸文紹介 1」、甲南女子大学国文学会「甲南国文」第 38 号、61-81 頁、1991。

<sup>4</sup> *Charles Baudelaire, his life by Théophile Gautier, translated into English, with selections from his poems, “Little poems in prose”, and letters to Sainte-Beuve and Flaubert and an essay on his influence by Guy Thorne, Greening & Co.: London, 1915.*

<sup>5</sup> 谷崎の作品の引用はすべて次の版に拠った。『谷崎潤一郎全集』全 26 巻、中央公論社、2015-2017 年。

<sup>6</sup> *The Poems of Charles Baudelaire. Selected and translated from the French, with an introductory*

lune » 「月の悲しみ」), “Exotic Perfume”(«Parfum exotique » 「異邦の香り」), “The Remorse of the Dead”(« Remords posthume » 「死後の悔恨」) を引用しそれぞれコメントを加えているが、とりわけ最後の詩篇に対し、このように述べている。

ボオドレエルは女性を愛した。しかし彼に歌はれた女性は、典型的の女性であつて、生き生きとした個性を有する女性ではない。(……) 語を換えて云へば、彼の詩に現はれて来る女は、女性の怨念、罪悪、凄艶を代表して居る永遠の Ghost である。ゴオティエは此れを名づけて ‘L’éternel féminin’(ママ) と呼んで居る。(『谷崎潤一郎全集』第4巻、499頁)

この«l’éternel féminin»<sup>7</sup> すなわち「永遠に女性的なるもの」とは、谷崎にとって芸術家が崇拝すべき「理想の女性」に他ならない。そしてこの箇所は、1918年の『前科者』の次のくだりにほぼそっくり反映している。

「君はゴオティエの書いたボードレール評伝を読んだことがあるかね(……)ゴオティエは斯う云っている。——ボオドレエルの詩の中にある女性は、箇々の現実の女ではなく、典型的な『理想の女性』である。彼は Une Femme を歌はないで La Femme を歌つて居るのだつて。——君のような Masochist の頭にある女の幻影も、やつぱり或る一人の女性ではなくて、完全な美しさを持つ永遠の女性なんだろう。(……)」(『谷崎潤一郎全集』第5巻、155頁)

そしてこの谷崎の「ボオドレエルの詩」は、1篇の散文詩の翻訳によって締めくくられるのだが、それが«Le Fou et la Vénus»(「道化と美神(ヴェヌス)」)である。このとき「愚人とギナスと(Le Fou et la Vénus.)」というタイトルが付された。その3年後の1919年10月には「解放」誌上に同じ作品を「ヴィナスと愚人と」と題を変えて掲載したことは先にも述べた通りである。またこの「解放」誌上掲載の「ボードレール散文詩集」において、谷崎が底本としたのがスタームの英訳本(1906)であることはすでにわかっている<sup>8</sup>。しかしながら、「愚人とギナスと(Le Fou et la Vénus.)」が依拠した原典が何かについては、管見の限りまだ明らかにはされていない。さらにタイトルのみならず、「愚人とギナスと(Le Fou et la Vénus.)」(1916)と「ヴィナスと愚人と」(1919)という2つのテキストの間には、

---

study, by F.P.Sturm, [*Canterbury Poets.*] Walter Scott Pub. Co.: London, 1906. この書には韻文詩50篇、散文詩18篇の翻訳、およびスタームの解説が含まれており、当時広く流布していた。

<sup>7</sup> この表現は、ソーンの翻訳でもフランス語イタリック体、つまり原著でゴーチエが用いた形で用いられている。なお、ラフカディオ・ハーンもまたこの«l’éternel féminin»によってボードレールと結びついている。これについては、以下の拙論を参照：北村卓「ラフカディオ・ハーンとボードレール」、大阪大学言語文化研究科〈言語文化共同プロジェクト2015〉「表象と文化 XIII」、33-42頁、2016。

<sup>8</sup> この点については、注1の拙論を参照。

かなりの異同が認められる。以下、フランス語原典、スタームの英訳、谷崎訳第1稿、谷崎訳第2稿の4者を比較することを通して、谷崎がこの散文詩の理解をどのように深め、さらには自らの作品のなかに活かしていったのかを考察する。

## 2. ボードレールの原典 とスターム訳

まず、ボードレールのオリジナルに照らし、スターム訳を検討する。この散文詩は7つの段落から構成されているが、便宜上、各段落の冒頭に番号を付している。また翻訳において問題となる箇所については、双方に下線を施している。

### a) ボードレールの原典 « Le Fou et la Vénus »<sup>9</sup>

- ① Quelle admirable journée ! Le vaste parc se pâme sous l'œil brûlant du soleil, comme la jeunesse sous la domination de l'Amour.
- ② L'extase universelle des choses ne s'exprime par aucun bruit ; les eaux elles-mêmes sont comme endormies. Bien différente des fêtes humaines, c'est ici une orgie silencieuse.
- ③ On dirait qu'une lumière toujours croissante fait de plus en plus étinceler les objets ; que les fleurs excitées brûlent du désir de rivaliser avec l'azur du ciel par l'énergie de leurs couleurs, et que la chaleur, rendant visibles les parfums, les fait monter vers l'astre comme des fumées.
- ④ Cependant, dans cette jouissance universelle, j'ai aperçu un être affligé.
- ⑤ Aux pieds d'une colossale Vénus, un de ces fous artificiels, un de ces bouffons volontaires chargés de faire rire les rois quand le Remords ou l'Ennui les obsède, affublé d'un costume éclatant et ridicule, coiffé de cornes et de sonnettes, tout ramassé contre le piédestal, lève des yeux pleins de larmes vers l'immortelle Déesse.
- ⑥ Et ses yeux disent : - "Je suis le dernier et le plus solitaire des humains, privé d'amour et d'amitié, et bien inférieur en cela au plus imparfait des animaux. Cependant je suis fait, moi aussi, pour comprendre et sentir l'immortelle Beauté ! Ah ! Déesse ! ayez pitié de ma tristesse et de mon délire !"
- ⑦ Mais l'implacable Vénus regarde au loin je ne sais quoi avec ses yeux de marbre.

### b) スターム訳 “ Venus and the Fool ”

- ① How admirable the day! The vast park swoons beneath the burning eye of the sun, as youth beneath the lordship of love.
- ② There is no rumour of the universal ecstasy of all things. The waters themselves are as though drifting into sleep. Very different from the festivals of humanity, here is a silent revel.

---

<sup>9</sup> ボードレールのテキストは以下の版に依拠した。Baudelaire, *Œuvres complètes*, Tome 1, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », pp.283-284, 1975.

- ③ It seems as though an ever-waning light makes all objects glimmer more and more, as though the excited flowers burn with a desire to rival the blue of the sky by the vividness of their colours; as though the heat, making perfumes visible, drives them in vapour towards their star.
- ④ Yet, in the midst of this universal joy, I have perceived one afflicted thing.
- ⑤ At the feet of a colossal Venus, one of those motley fools, those willing clowns whose business it is to bring laughter upon kings when weariness or remorse possesses them, lies wrapped in his gaudy and ridiculous garments, coiffed with his cap and bells, huddled against the pedestal, and raises towards the goddess his eyes filled with tears.
- ⑥ And his eyes say: "I am the last and most alone of all mortals, inferior to the meanest of animals in that I am denied either love or friendship. Yet I am made, even I, for the understanding and enjoyment of immortal Beauty. O Goddess, have pity upon my sadness and my frenzy."
- ⑦ The implacable Venus gazed into I know not what distances with her marble eyes

まずタイトルだが、フランス語原文で « Vénus » の前に付けられていた定冠詞 « la » が英語訳では落ちている。定冠詞がなければ « Vénus » はウェヌスという女神そのものを指すことになる。原題では定冠詞が付くことによって、女神の「像」であることが示されているのだから、英語訳でも “the Venus” とすべきであろう。さらに英語訳では、原タイトルとは異なり、「道化」と「ウェヌス」の順序が逆となり、「ウェヌス」が先に来ている。おそらく「ウェヌス」を強調するためであろうが、この詩で重要なのはむしろ「道化」の存在であることを考えれば、妥当な判断とはいえない。

次に、第2段落の « une lumière toujours croissante » は「いよいよ明るさ（勢い）を増す（太陽の）光」という意味合いだが、スターム訳の “an ever-waning light” では、「ますます衰え行く（太陽の）光」と、まったく逆の意味に捉えられている。本来ならば、“waning” ではなく “waxing”（現代ならば “increasing” など）とすべきであっただろう。-n-と-x-の単純なスペルミスが結果として正反対の意味をもたらすことになった。さらに谷崎が「ボオドレエルの詩」を書くに際して読んだゾーンの著作に収録されたこの詩の英語訳でも “The waning light” と訳されており、スタームの誤訳（校正の過程で見過ごされたのかもしれない）がゾーンにも踏襲されたことがわかる。

続いて第5段落の « un de ces fous artificiels » は「人工的に作られた痴呆の一人」の意であり、次に来る « un de ces bouffons » を同格的に説明する表現となっている。フランス語の « fou » には「気の触れた人」と「道化」の両方の意味があるため、このような表現が成立しているのである。英語の “fool” も同様のはずだが、スタームの訳では “one of those motley fools” 「あのまだら模様の衣裳をまとった道化の一人」となっており、原文の意味をつかみ損ねている。

同じく第5段落3行目の « coiffé de cornes et de sonnettes » 「角と鈴のついた被り物をして」は “coiffed with his cap and bells” 「帽子と鈴を頭に被った」となっており、文意がやや曖昧になっている。

さらに、第5段落の最終部では、この詩のキーワードとでもいうべき原文の « l'immortelle Déesse » 「不滅の女神」から « immortelle » 「不滅の」が削られ、単なる “the goddess” 「女神」となってしまう。明らかに不適切な翻訳である。

第6段落の « Ah ! Déesse ! » と “O Goddess” については次節で考察する。

以上、この短い散文詩1篇を見ただけでも、スタームの翻訳にはかなりの問題があることがわかる。スタームの著作が日本におけるボードレール受容において果たした役割の大きさを鑑みれば、こうした誤訳を含め、いま一度その翻訳の中身を詳細に検証する必要があるだろう。

### 3. 2つの谷崎訳 (1916/1919)

以下に谷崎訳を発表年代順に引用する。原文および英訳と同様、各段落には数字を振り、特に問題となる箇所には下線を引いている。

#### a) 「愚人とギナスと (Le Fou et la Vénus.)」(1916)

- ①何と云ふ素晴らしい天気であらう！ 広い公園が太陽の燃ゆる眼に囚はれて、ちやうど恋愛の魔力に囚はれた青年のやうに、息も絶え絶えに喘いで居る。
- ②地上のあらゆる物は恍惚として声を立てず、水の流れは睡たげにどんよりと澱み漂ひ、馬鹿騒ぎをする人間の歡樂に似もやらで、自然は今や沈黙の饗宴に酔うて居る。
- ③絶え間なく燃え盛る光りに射られて下界の万象はいよいよぎらぎらと輝きを増し、昂奮させられた草木の花は、晴れ渡つた蒼穹の色と其の生彩を争ふが如く咲き誇り、暑熱を含んだ空気にかげらふ諸々の薫が、煙のやうに空中へ立ち登つて行く。
- ④その時、此の万物の喜びの中に、たつた一人の苦しみ悶えて居る人間を私は見た。
- ⑤巨大なギナスの像の足もとに一人の愚者が居る。彼は悔恨と倦怠に悩む王様たちを笑はせて、ご機嫌を伺ふのを常職とする道化役者の類と見える、けばけばしい、おどけた服を身に纏ひ、鈴のついた光つた帽子を頭に戴き、台石にひしとしがみ着いて涙に充ちた両眼を挙げつゝ、永遠の女神の像を打ち仰いでいる。
- ⑥さうして彼の両眼がこんな言葉を語つて居る。——「私はあらゆる人間のうちに、一番卑しい、一番孤独な奴でございます。私には、相手になつてくれる恋人もなければ友達もないのでございます。だから私は最も哀れな禽獣よりも劣つた奴でございます。しかし私でも、たとい私のやうな者でも、永遠の美を知る為めに、永遠の美を楽しむ為めに此の世に生まれて参りました。あゝ女神よ、どうぞ私の悲嘆と狂妄とを憐み給へ！」
- ⑦しかし森厳なギナスの像は、大理石の眼を静かに据えて、何処とも知れぬ遙か彼方を一

新に視詰めて居る。(『谷崎潤一郎全集』第4巻、500-501頁)

b) 「ヴィナスと愚人と」(1919)

- ①何と云ふ素晴らしい日であらう！ 広い公園は太陽の輝き燃ゆる眼の下に、恰も若人が故意の重荷の下に居るやうに、息も絶え絶えに気が遠くなつてゐるのである。
- ②其処には万物が人知れず静まりかへつて大いなる歡喜に酔ひしれ、もろもろの水の流れは睡るが如くどんよりと浮かびただよひ、人間のお祭り騒ぎとは甚しく違つて、ただ沈黙の宴樂があるばかりである。
- ③それはちやうど衰へつつある光りの為に凡べての物がその輝きを次第次第に増すやうにも見え、昂奮させられたもろもろの花が、大空の青さと争はんが為に生き生きとした色を放つて情慾に燃えて居るやうにも見え、或ひは暑熱が、花の香と云ふ花の香を目に見える水蒸気の形にさせて、大空の方へほのぼのと立ち昇らせて居るやうにも見える。
- ④しかしその万物の歡喜の中で、私は一箇の苦しめるものを見たのである。
- ⑤巨大なヴィナスの像の足下に、あのけばけばしい斑な衣を身に纏うた愚人の一人、ものうい時や悔しい時に王様たちを笑はせるのが商売のあのお人好しの道化者が、派手なおどけた衣裳を着て、鈴の附いた帽子を冠つて、土台の石にしがみ着きつつひれ伏しながら、涙を湛へた眼を以つて女神の姿を打ち仰いでいた。
- ⑥さうして其の眼はこんなことを云つて居た。——「わたくしは此の世に生きとし生けるものの有らゆる中で除け者にされた、一番卑しい人間でございませぬ。わたくしには恋人もなく友達もありませんので、動物中の最も卑しい動物よりも劣つた人間でございませぬ。しかしわたくしでも、たとへわたくしのやうな者でも、やつぱり永遠の「美」を味わひ楽しむために生まれて来たのでございませぬ。おお女神よ、どうぞわたくしの心の悶えと物狂はしさとを憐み給へ！」
- ⑦ヴィナスの像は寂然として、彼女の大理石の眸を挙げて、何処とも知れぬ遙かな所をちつとに視つめて居るのであつた。(『谷崎潤一郎全集』第7巻、465-466頁)

まずタイトルだが、1916年版「愚人とギナスと (Le Fou et la Vénus.)」は、オリジナルに即して訳され、フランス語原題そのものも日本語タイトルの次に挿入されている。いっぽう1919年版のタイトル「ヴィナスと愚人と」は、スターム版に倣っていることがわかる。後者についてはすでに了解済みではあるが、前者において、谷崎が参照したのはフランス語版だったのではないかという推測がここで成り立つ。こうした観点から、いま一度「ボオドレエルの詩」の本文を見てみよう。この文章の末尾、「愚人とギナスと (Le Fou et la Vénus.)」を紹介する直前では以下のように書かれている。

私はわづかに「悪の華」の中から短い三つの詩を択んだに過ぎないが、それでも多少

は此の詩人の片鱗を窺ふ事が出来るかと思ふ。「悪の華」の外に、彼の散文詩“Petits Poèmes en Prose”を集めた本がある。私は試みにその一つを、私の拙い日本語に訳出して此の文章の終りに掲げる事としよう。

谷崎が韻文詩3篇を引用したスタームの本には、当該の作品を含む散文詩18篇の翻訳が収録されており、また1919年の「ボードレール散文詩集」では、この書を底本としているのだから、ここでも当然スターム訳が参照されたものと思われがちであるが、必ずしもそうではないことが、“Petits Poèmes en Prose”(小散文詩)というフランス語が引用されたこの箇所からも、またタイトル「愚人とヴィナスと(Le Fou et la Vénus.)」の訳し方からもまず想起される。

第2段落の«une lumière toujours croissante»(オリジナル) / “an ever-waning light”(スターム訳)に該当する谷崎訳を見ると、1916年版は「絶え間なく燃え盛る光り」と、フランス語原文からほぼ正確に訳しているのに対し、1919年版は「衰へつつある光り」と、スターム訳に従って誤訳しているのが分かる。

第5段落の«un de ces fous artificiels»(オリジナル) / “one of those motley fools”(スターム訳)において、1916年版ではその意味が捉えきれなかったのか、あえて«artificiels»を訳さず、あっさり「愚者の一人」としている。他方1919年版では「あのけばけばしい斑な衣を身に纏うた愚人の一人」とされ、スターム訳をもとにしながら、さらにそれを強調する訳となっている。

続いて同じ第5段落3行目の«coiffé de cornes et de sonnettes»(オリジナル) / “coiffed with his cap and bells”(スターム訳)の箇所は、それぞれ「鈴のついた光った帽子を頭に戴き」(1916) / 「鈴の付いた帽子を冠つて(1919)」となる。後者はスターム訳に従ったとして、問題は前者の「光った帽子」という表現である。谷崎が原典を参照していたとするならば、この箇所は「尖った帽子」となるべきであろう。谷崎は「角」cornesのついた被りものを「尖った帽子」で表したかったのではないだろうか。「ボードレールの詩」が掲載された雑誌「社会及国家」の原資料が手元がないので確たることはいえないにしても、校正、印刷の段階で「尖」の文字が「光」に誤って置き換わった可能性はきわめて高いのではないかと推察される。

第5段落最後のところ«l'immortelle Déesse» / “the goddess”こそ、谷崎が1916年時点においてフランス語原典に依拠していたことを示す決定的な証拠となる。すなわち、スターム訳に従った1919年版の「女神の姿」に対し、谷崎は1916年版において「永遠の女神の像」とオリジナルに忠実に訳しているのである。

最後に第6段落の«Ah! Déesse!» / “O Goddess”は谷崎訳では、「あゝ女神よ」(1916) / 「おお女神よ」(1919)となっている。見ての通り、「Ah!」と“O”の発音がそれぞれの訳語に反映していることがわかる。

以上より、1919年の「ボードレール散文詩集」に収められた「ヴィナスと愚人と」がス

タームの翻訳本に依るのに対し、1916年「ボオドレエルの詩」の中に記載された「愚人とギナスと (Le Fou et la Vénus.)」が依拠したのは、ボードレールの原典だったことが明らかとなった<sup>10</sup>。

さらに、この当時谷崎がフランス語に向けていた強い関心は、「ボオドレエルの詩」冒頭の「二三年前、漸く私がフランス語の初歩を習い始めた時分に」という記述からも、また1919(大正8)年10月～1920年1月にかけて、やはり「社会及国家」に連載した、芥川龍之介との共訳、ゴーチエ作「クラリモンド」<sup>11</sup>において谷崎がフランス語版を参照していたらしいことから、読み取れる。1916年時点で谷崎がボードレールのフランス語版を手にしていてまったく不思議はない。さらに「ボオドレエルの詩」の中で、詩集『悪の華』冒頭でボードレールがゴーチエに献じた言葉がフランス語で引用されている。散文詩集『小散文詩／パリの憂鬱』と『悪の華』の双方のオリジナルが彼の手の届くところにあったと考えるのが自然であろう。

#### 4. 「ヴィナスと愚人と」(1919) から『鮫人』へ

永遠の女神に拝跪する芸術家という図式は、1916年の「愚人とギナスと (Le Fou et la Vénus.)」以降、谷崎の裡で醸成され、いくつもの作品の中に姿を現す。そして1919年の「ヴィナスと愚人と」の訳に至り、谷崎はこの作品をさらに自らの小説世界に引き寄せていることが見てとれる。中でも第5段落で二重下線を施したところ、「土台の石にしがみ着きつつひれ伏しながら、涙を湛へた眼を以つて女神の姿を打ち仰いでいた」というくだりは、「ひれ伏す」という原文にも英訳にもない表現を導入することによって、永遠の女神に拝跪する道化＝愚人＝痴人＝芸術家という構図をよりはっきり示すことになる。そしてこの構図は、その数か月後、中断はしたが谷崎初の長編小説の試みとなった『鮫人』(初出「中央公論」1920(大正9)年1月～10月)の中にもきわめて意識的に導入されることになるのである。

服部も見やうに由つては紀文大尽にも見え、仙人にも見え、不平分子にも見えたことはたしかだが、たゞ彼がいくらかでもそんな人々と違つて居る点があつたとすれば、彼の場合には、前に云つた其等の孰れもであると同時に、ボオドレールが其の散文詩「ヴィナスとフル」で歌つたところのフルでもあつたと云ふことである。チャ

<sup>10</sup> この当時、ボードレール散文詩の英語訳は少なく、またここまで原文に忠実で正確な翻訳は存在しないので、フランス語原典を底本としたと結論づけられる。どの版に依拠したのかは現段階では確定できないが、ミシェル・レヴィ兄弟社刊行の『ボードレール全集』第4巻『小散文詩—人工楽園』*Petits poèmes en prose—Les Paradis artificiels* (初版 1869)、あるいはその普及版である可能性が考えられる。

<sup>11</sup> 「クラリモンド」はまず芥川がラフカディオ・ハーンの英語訳から訳したため、このタイトルとなったゴーチエの原題は「*La Morte amoureuse*」(「死霊の恋」)である。谷崎がフランス語版を参照していたとの推定は、『谷崎潤一郎全集』第6巻の生方智子氏の解題に記されている。なお、この翻訳の存在を明らかにしたのも細江光氏である(細江光「谷崎潤一郎全集逸文紹介2」、「甲南女子大学紀要」第27号、1991)。

リネに出て来る道化役のやうなけばけばしい服を着けて鈴の附いた帽子を冠つて、ヴィナスの像の前にひれ伏して居るフール、——その毒々しい白粉を塗つたおどけた顔つきの中にある二つの眼には、よくよく見ると、やはり永遠の美を慕うて已まない人間の嘆きと悶えとが涙で光つて居る、——さう云ふ切ない苦しい気持ちが、服部の胸にはあつたのである。さうして其の気持ちが、彼をまだ全くの痴人にはさせてしまはなかつたところのもの、彼を痴人から芸術家の方へ区別してくれるところのものだつたのである。(『谷崎潤一郎全集』第8巻、18頁、下線強調は筆者)

## おわりに

細江光氏の指摘するように<sup>12</sup>、『鮫人』以降、谷崎潤一郎の作品において直接ボードレールやその作品に言及がなされることは、いくつかの例外を除いてなくなる。しかしながら、谷崎がボードレールを通して獲得した文学創造における基本的構図は連綿と生き続けたのではないだろうか。その最晩年、「シカ」（噺家のこと）の語り口で身边を自在に綴った『当世鹿もどき』（初出「週刊公論」1961(昭和36)年、3月～7月)の「猫と犬」と題された文章の冒頭にこうある。

手前が猫好きになりましたのは、ボードレール先生なんかの影響が多分にあるのかもしれない。(……)猫は我が儘でなかなか飼ひ主の云ふことを聴きません。却つて飼ひ主を自分の思い通りに使います、その点は犬と正反対でございますが、猫好きの人間にはその我が儘なところがたまらなく可愛いんでございます。いつたいに猫好きの人間にはフェミニストが多いと申しますな。猫を可愛がる男、猫の云ひなりになる男は、大概女性にも云ひなりになる、だからご婦人は猫好きの男子と結婚なさるのがよろしい、さういう旦那さんはきつと奥さんにも優しいと申しますな。

(『谷崎潤一郎全集』第23巻、290-291頁)

ここでは、猫と女性が重ね合わされているのだが、この文章を書くにあたり、ゴーチエの『ボードレール評伝』を再読したようであると、細江光氏は、後藤末雄の言から推察されている<sup>13</sup>。確かにこの『評伝』には、自らも無類の猫好きであったゴーチエが、猫の美点を礼賛しながら、それをボードレール自身への讃美に重ねる印象的な箇所がある。そしてそのすぐ後に「*l'éternel féminin*」「永遠に女性的なるもの」についてのくだりが続くのである。読者にしてみれば、「猫」と「永遠に女性的なるもの」は連続しているかの印象を与えられる。谷崎は、晩年になってもゴーチエの『ボードレール評伝』を忘れることなく、そこに猫に関する記述があることもしっかりと記憶していたのである。

<sup>12</sup>注3の文献、73-74頁。

<sup>13</sup> 同前

そして「犬と猫」を発表 (1961年7月)してからわずか数か月後に、谷崎は『瘋癲老人日記』(初出「中央公論」1961(昭和36)年11月～1962年5月)の連載を開始する。ここでは、嫁の颯子の足型から仏足石を作り、死後もその足下に踏み続けられることを夢見る老人が登場する。猫といえば『猫と庄三と二人のをんな』(初出「改造」1936(昭和11)年1月・7月)がまず思い浮かぶが、谷崎が描く猫は明らかに男が崇拜の対象とする女性と密接に繋がっている。そうした意味において、『瘋癲老人日記』の颯子もまたボードレールを淵源とする猫属の末裔といえるのではないだろうか。

### 主要参考文献

(谷崎潤一郎)

『谷崎潤一郎全集』全26巻、中央公論社、2015-2017。

.....

(ボードレール)

Baudelaire, *Œuvres complètes*, Tome 1, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1975.

*The Poems of Charles Baudelaire*. Selected and translated from the French, with an introductory study, by F.P. Sturm, [Canterbury Poets.] Walter Scott Pub. Co.: London, 1906.

.....

(ゴーチエ)

*Baudelaire par Théophile Gautier*, présentation et notes critiques par Claude-Marie Senninger, avec la collaboration de Lois Cassandra Hamrick, Klincksieck, 1986,

*Charles Baudelaire, his life by Théophile Gautier*, translated into English, with selections from his poems, "Little poems in prose", and letters to Sainte-Beuve and Flaubert and an essay on his influence by Guy Thorne, Greening & Co.: London, 1915.

テオフィル・ゴーチエ『ボードレール』井村実名子訳、国書刊行会、2011。

.....

芥川龍之介「あの頃の自分の事」、『芥川龍之介全集』第4巻、岩波書店、1996。

(初出「中央公論」)、1919年1月)

小林秀雄「谷崎潤一郎」、『小林秀雄全集』第2巻、新潮社、2001。

(初出「中央公論」、1931年5月)

佐藤春夫「潤一郎。人及び芸術」、『定本佐藤春夫全集』第20巻、臨川書店、1999。

(初出「改造」、昭和1927年3月)

.....

- 北村卓「谷崎潤一郎とボードレール—谷崎訳「ボードレール散文詩集」をめぐって」、  
大阪大学言語文化部・言語文化研究科「言語文化研究」第18号、1992。  
\_\_\_\_\_「ラフカディオ・ハーンとボードレール」、大阪大学言語文化研究科〈言語文化共  
同プロジェクト2015〉「表象と文化 XIII」、2016。
- 細江光「谷崎潤一郎全集逸文紹介1」、甲南女子大学国文学会「甲南国文」第38号、1991。  
\_\_\_\_\_「谷崎潤一郎全集逸文紹介2」、「甲南女子大学研究紀要」第27号、1991。
- 矢野峰人「日本に於けるボードレール」、『矢野峰人全集』第2巻、国書刊行会、2007。  
(初出「日本比較文学会会報」第7号～80号、昭和1956年10月～1975年1月、  
及び「比較文学」第19巻、1976年12月)